第三章　其ノ後ノ露國ノ滿洲活躍

露國ノ韓國中立共同保障提議

以上ハ北清事變ニ關聯シテ起ツタ露國滿洲活躍ノ前半テ、此間英獨協約カ結ハレ、又日英同盟モ締結セラレタカ、此二件ハ後廻シトシテ、引續キ滿洲問題其後ノ成行ヲ記憶ヲ辿ツテ書イテ見樣ト思フ。尤モ本問題ニ關スル日露交渉文書ノ大部分ハ日露開戰直後議會ニ頒布セラレタカラ、茲ニハ成ルヘク夫レト重複セヌ材料ヲ揭ケル積リタ。

滿洲還附條約ニ依ツテ露國ハ同條約調印後約六個月間ニ盛京省ノ西南部遼河迄ノ撤兵ヲ爲シ、次ノ六個月間ニハ盛京省ノ殘部ト吉林省カラ撤兵シ、更ニ其次ノ六個月間ヲ以テ黑龍江省全部カラ軍隊ヲ引揚ルコトヲ約束シ、第一期ノ撤兵ハ條約通リ實行シタカ、其後言ヲ左右シテ約束ヲ履行セヌノミナラス、「アレキシエフ」「ベゾブラゾフ」一派ノ跳梁益々甚シキヲ加ヘテ來タ。是ヨリ先キ明治三十四年一月在東京露國公使ハ政府ノ訓令ニ依ル趣テ、列强ノ共同保障ノ下ニ韓國ヲ中立トセンコトヲ提議シタカ、我國ハ之レニ對シテ、元來日本カ露國ノ遼東半島租借ニ積極的反對ノ態度ヲ採ラナカツタノハ、該租借カ一時的性質ヲ有スルノミテ、又同租借カ韓國々境迄延長セラレナカツタカラテアルカ、滿洲ニ於ケル現時ノ狀態ハ全ク之レト異ツテキルカラ、日本政府ハ、滿洲カ舊事態ニ回復サレル迄本件交渉ニ應スルコトハ出來ヌト答ヘタ。元來列國保障ノ下

ニ韓國ヲ中立トスルコトハ、清國ト戰爭迄シテ贏チ得タ韓國ニ於ケル我優越權ヲ無實ニ歸セシムルニ外ナラヌ故、日本カ此考案ヲ無條件テ受ケ容レ得ヌノハ勿論テ、又露國カ此樣ノ提議ヲシタ動機ニハ我國ニ對シ甚タ不純ナ考カ含マレテ居タモノニ相違ナイ。

西外相ノ滿韓交換提議

尤モ單ニ日露兩國ノ間丈ケテ或種ノ協定ヲ爲サントスル考案ハ、當時ノ我國識者間ニモ甚タ有力テ、既ニ明治三十一年ニ第三回目ノ日露議定書カ出來タ當時カラ問題ト成ツテ居ル。卽チ同議定書ノ成立間際ニ在東京露國公使ハ西外務大臣ニ對シ、最近極東ノ形勢カ一變シタカラ、露國政府ハ如何ナル故障ニ遭ツテモ、清國ヨリ旅順港及大連灣ノ租與ヲ受ケルニ決定シタト通告シタノテ、西外相ハ若シ露國カ滿洲ニ港灣ヲ得ル以上、日本トシテ朝鮮テ露國ト單ニ平等ノ地位ヲ保ツ丈ケテ滿足シテ居ルコトハ出來ヌ、又將來日露兩國間ノ衝突ヲ避ケル爲ニモ双方ノ勢力範圍ヲ定メテ置ク必要カアルカラ韓國ニ對シテ勸告及補助ヲ爲ス權利ヲ一括我國ニ認メルナラ、我國モ亦滿洲及其沿岸ヲ日本ノ利害關係ノ範圍外ニ置クヘシト回答シタ。卽チ是ハ滿韓交換提議ノ發端ト見ルヘキテアル。然ルニ露國政府ハ同國ト境ヲ接スル韓國ノ運命ニ關シ、總テノ關係カラ脫却スルカ如キコトハ到底承諾出來ヌト返事ヲシ、交渉中ノ日露議定書ニ韓國カ外國ノ補助及勸告ヲ仰ク必要ヲ生シタル時ハ、獨立國當然ノ權利トシテ同國ハ其選擇ヲ露日兩國ニ就テ取捨スルノ自由アリトノ規定ヲ設ケンコトヲ提議シタ。當時ノ我國ハ未タ强硬ニ自己ノ主張ヲ固執スル丈ケノ用意カ無カツタカラ、右ニ對

シ韓國若シ日本又ハ露西亞ニ勸告補助ヲ求メシ時ハ、兩國先ッ相互協調ヲ遂ケシ上ニ非サレハ、練兵教官又ハ財務顧問ノ任命ニ付、何等ノ處置ヲモ爲サザルヲ約ス、トノ修正案ヲ出シ、斯クシテ四月二十五日ノ日露議定書ハ調印サレタ。

旅大租借條約ト我態度

此談判ノ進行中旅大租借條約ハ締結セラレ、三月二十九日在東京露國公使ハ左記要領ノ公文ヲ西外務大臣ニ送致シタ。

本使ハ三月二十七日北京ニ於テ調印セラレタル條約ニ依リ、清國政府ヨリ露國政府ニ對シ旅順口、大連灣及其附近ノ土地ヲ使用上讓與シタル事ヲ、本國政府ノ命ニ依リ日本政府ニ通知ス、本使ハ右港灣及土地ハ直ニ露國軍隊ヲ以テ占領セラルヘク、露國々旗ハ清國々旗ノ側ニ揭揚セラルヘキコトヲ附言スヘキヲ命セラル。

此語氣ニ對スル感想批判ハ讀者ニ一任スルトシテ、露國公使ハ右ノ通告ニ對スル返答ヲ求メタ。西外相ハ之レニ對シ右ハ素ト返答ヲ要スル性質ノ通知テ無イカラ我ヨリ之レニ答フル必要ヲ見ヌト述ヘタラ同公使ハ露國カ韓國カラ其士官ヲ引揚ケタ以上日本カラモ何カ滿洲ニ關スル保障ヲ得ルノカ當然タト主張シタ。西外相ハ露國カ全然韓國カラ手ヲ引カヌ限リ返事ヲスルコトハ出來ヌト斷言シ物分レトナッタカ、日本トシテハ成ルヘク速カニ日露議定書モ成立サセタイノテ、四月十六日露國公使ニ對シ、若シ露國カ何處迄モ滿洲及其海

岸ノ事ニ關シテ我公認ヲ求ムルナラハ、我モ亦茲ニ提起シタ條件卽チ韓國ノ事ヲ全ク我ニ委ヌルコトヲ要求セネハナラヌ、然シナカラ露國カ議定書ノ調印ニ同意スレハ我政府テモ露國ノ旅大占領ヲ默視スヘシト答ヘ、此問題ハ之レテ一段落ヲ告ケタ。

露國ノ滿洲占領ト我國論

其後北清事變ニ關聯シ露國カ滿洲ニ出兵シ、威力益々南下シタ爲滿韓問題ハ我國朝野憂慮ノ焦點ト成ッタカ、當時ノ國論ヲ大別スレハ露國ト協定シテ韓國ニ於ケル我地歩ヲ堅メントスル所謂滿韓交換論ト、露國ノ勢力ヲ滿洲カラ驅逐シテ極東ノ平和ヲ確立セントスル强硬論トニ二分サレテ居タ樣ニ思ハレル。前論主張者ノ大立物ハ伊藤侯テ、其考案ヲ實現セシムル目的テ明治三十四年十一月露都ヲ訪問シタカ、旅行ノ途中日英同盟ノ談判カ著シク進捗シタノテ、同侯ハ初期ノ計畫ニ齟齬ヲ生シ不平滿々テ歸京シタ。伊藤侯ノ訪露後間モ無ク着任シタ栗野駐露公使モ亦同侯ト同意見テ、日英同盟ノ締結カ同公使出發前其對露方針トシテ政府ノ了解ヲ得タ所ト合致セヌ爲、該同盟談判ノ模樣ヲ赴任ノ旅中テ聞タ同公使カ意甚タ平カテ無カッタノハ當然テアル。然シ日露協和ヲ主張スル伊藤侯及其同志モ又日英同盟ヲ結ンタ桂首相及小村外相モ、當時其政策ノ根本ニ差カアッタトハ考ヘラレヌ、要ハ我國防ノ第一線タル韓國ニ於ケル我地歩ヲ如何ニシテ確保スヘキヤト云フ其手段行キ道ノ差テアッテ、伊藤侯ノ一派ハ專ラ露國ト協定ノ途ニ由ッテ之ヲ求メントシ、桂、小村ノ一派ハ從來ノ經驗ニ照シ露國ノ約束ハ餘リニ信賴スルニ足ラヌカラ、單ニ紙上ノ文書ノミテナク同時ニ實

際ニ之ヲ求メントシ、之レカ爲ニハ我威力ヲ擴大スル必要ヲ認メ、英國ト同盟スルニ至ツタノタカラ、兩派トモ最初ハ日露ノ妥協ニ依ツテ滿韓問題ヲ解決セントスルノ眼目ニ付イテハ一致シテ居タノテ、此事ハ日英同盟協約第四條ニ初メ「上記ノ利益ニ關係スル別約」ト在ツタノヲ「上記ノ利益ヲ害スヘキ別約」ト改メ、同盟協約カ日露妥決ノ障害ヲ爲サヌ用意ヲシタノニ見ルモ明瞭テアル。栗野公使カ自己ト或意味ニ於テ政見ヲ異ニスル外相ノ下ニ、飽迄日露案件圓滿解決ノ爲ニ努力シタノハ、畢竟根本ノ大原則ニ差異カ無ツタカラタト考ヘル、從ツテ滿洲カラ露國ヲ驅逐セントスル强硬論ハ、頑冥ナ露國カ飽迄我慾ヲ擅ニセントシ、少シモ我提議ニ耳ヲ傾ケナカツタ結果氣勢ヲ揚ケタモノテ、日露交渉ノ初期ニハ其影ハ未タ薄カツタノテアル。

伊藤公ノ露都訪問

伊藤侯ノ露都訪問カ其持論抱負ヲ具體化セシメントスルニ在ツタコト、同侯カ日英同盟談判ノ進捗振リヲ旅中聞カサレタノハ全ク寢耳ニ水テアツタコト、從ツテ同侯ノ露國行カ著シク其鼻柱ヲ挫カレタコトハ前ニ一言シタカ、同侯ノ露都訪問ハ既ニ先方ニ通知濟ミ故、今更ラ之ヲ中止スル譯ニモ行カス、夫レハ夫レ是レハ是レトシテ豫定ノ行動ヲ執ルニ決シ、露都ニ到着シテ明治三十四年十二月二日外務大臣「ラムスドルフ」伯ト第一回ノ會見ヲシタ。此時ノ談話ハ相當興味アル樣考ヘルカラ伊藤侯ニ隨伴シ通譯トシテ同席シタ都筑馨六氏カラ傳聞シタ儘ヲ左ニ記載スル。

侯　自分ハ決シテ政府ノ命ヲ帶ヒス。從來自分ハ貴國ニ對シテ親密ナル友誼ヲ以テ交際スルノ必要ヲ感シ

居タルニ、過日謁見ノ際貴國皇帝陛下ヨリ、日露兩國ハ隣邦ニシテ、最モ親密ナル交際ヲ爲スノ必要アルコト勿論ナレハ、互ニ協和ノ出來得ヘカラサル筈ナク、兩國協和スレハ單ニ東亞ノ平和ヲ維持スル所以ナルノミナラス、或ハ更ニ大ナル目的ヲ達シ得ヘシトノ勅語アリ、其際自分ハ我　聖上ニ於カセラレテモ同一樣ニ感セラルルニ付、陛下ノ勅語ヲ奏聞セハ定メテ御滿足アルヘシト奉答シタルニ陛下ハ更ニ右ハ單ニ朕ノ語ニ留マラス朕ノ確信スル所ナリ、獨リ朕一人ノミナラス當國上下一般此ノ如ク感シ居ルナリ云々ノ勅語アリ、右勅語ハ自分ニ於テ深ク感佩シ、平常ノ所信ヲ一層强クシタル次第ナリ。

外相　右ノ事情ハ昨日皇帝陛下ヨリ親シク承リ、自分モ同感ナリ。

侯　兩國ノ交際ヲ親密ナラシメン爲ニハ、其間ニ播マル一種ノ誤解ノ原因トナルノ虞アルモノヲ除カサルヘカラス、之レ朝鮮問題ナリ。

外相　至極御尤ナリ、然シ該問題ニ關シテハ先年既ニ露國政府ヨリ一ノ解決案ヲ提出シ（局外中立ノ件）タルニ、其際日本政府ハ現在協定ノ効果至テ滿足ナルヲ以テ、更ニ他ノ協定ヲ設クルノ必要ヲ認メストノ理由ニテ之レヲ拒絶セラレタリ、之レヲ以テ之レヲ見ルモ當方ニ於ケル意嚮ハ明カナレト右ノ如キ行キ掛リナルニ付、此上ハ日本ノ方ニテ何カ成案アルヲ待ツノ地位ニ在リ。

侯　夫ノ中立談ハ其當時北清事變モ在リ、且又貴我兩國間ニ第三國ヲ挾ムノ必要ナシト認メタルカ故ニ不完全ナカラモ從來ノ協定ヲ以テ寧ロ勝レリト爲シタルナリ。

抑モ韓國問題ハ日本ノ獨立上殆ント死活ノ問題ナリ、我國民ハ常ニ朝鮮ハ貴國ヨリ併合セラレルノ虞アリトノ疑惑ヲ抱キ居レリ、勿論日露兩國間ニハ韓國ニ關スル協定ハ現存シ居レトモ、之レヲ目シテ最終ノモノト認ムルコトヲ得ス、更ニ明確ナル協定ヲ設クルニ非サレハ兩國ニ於テ絶ヘス誤解ヲ生スル恐アリ、元來韓國ニ於ケル日本ノ關係ノ頗ル大ナルハ貴國政府ノ承認スル所ナリ、而シテ朝鮮ノ國タルヤ尚ホ幼稚ニシテ、啻ニ我國民ノ正統ナル利益及權利ヲ保護スル實力ナキノミナラス、往々ニシテ領土内ニ騷亂等起ルモ自ラ之レヲ鎮定スルノ力ヲ缺クコトアリ、故ニ朝鮮ニ與フルニ助言及援助ヲ以テスルニ非サレハ、最大利害ナル關係モ有名無實ナリ、然リ而シテ貴我兩國ヨリ交々此助言及援助ヲ與フルトセハ、終ニハ貴我兩國間ニ衝突ヲスル虞ナシトセス。

外相　露日兩國政府間タニ協和整ヒ、兩國常ニ一致シテ朝鮮政府ニ迫ラハ、朝鮮政府ハ其勸告ヲ容レサル筈ナシト信ス、朝鮮ニ事件起ル毎ニ貴國ハ白ト云ヒ我邦ハ黑ト云フハ、之レ卽チ朝鮮ヲシテ兩國ヲ利用スルコトヲ得セシムル所以ニシテ、恰モ「ペルシヤ」、「トルコ」其他之レニ類スル諸國カ自己ノ實力ナクシテ而カモ尚ホ當今一ツノ勢力タルコトヲ得ル所以ニ異ナラス。故ニ今日ニ於テ兩國政府間ニ細密ナル協定ヲ設ケ置キ、他日兩國ノ意見異ナルカ如キコトヲ豫防スルニ於テハ、朝鮮ヲシテ獨立國ノ義務ヲ果サシムルコトヲ得ヘシ。

侯　閣下ノ御考案ハ却テ兩國間ニ衝突ヲ招ク原因ナリト信ス。如何ニ兩國政府カ相協和スルモ、出先ノ人物間ノ意見ノ相違ヨリ誤解ヲ生スルノ虞ナシトセス。協定ノ精密ナレハ精密ナル丈ケ、益々解釋ヲ異

ニシ得ヘキ點ヲ增加スルニ至ルヘシ。試ミニ朝鮮ニ一揆起リタリト假定シ、貴我兩國ヨリ出兵シテ之レヲ鎭定スルモノトセハ、兩國ノ兵士間ニ衝突ノ起ル恐レアルハ論ヲ俟タス。故ニ朝鮮ニ與フルノ援助ハ貴我兩國ノ內孰レカ一方ノミニテスルヲ便ナリト信ス。然リ而シテ御熟知ノ如ク朝鮮ノ獨立タルト否トハ實ニ日本ノ死活問題ナリ。隨ツテ之レヲ貴國ニ一任スルハ日本國民ノ決シテ安ンセサセル所ナリ。

外相　援助トハ如何ナル事ヲ指サルルヤ。

侯　生命財產ノ保護ハ勿論國內ノ秩序スラ、往々自力ヲ以テ維持スルコト能ハス、從ツテ之レニ與フルニ其目的ヲ達セシムルニ必要ナル援助ヲ以テスルノ謂ナリ。

外相　然ラハ軍事的援助ヲモ含ムモノカ。

侯　無論ナリ、騷亂等ノ場合ニ於テハ、出兵シテ之レヲ鎭定スルニ非サレハ他ニ途ナシト信ス。

外相　元來露國ハ朝鮮ニ對シテ毫モ他意ナシト雖モ、其領土ヲ他國カ軍略的目的ノ爲メニ用ユルコト丈ケハ、飽迄拒マサル可ラス。

侯　夫レハ御尤ノ次第ニテ、我邦ト雖朝鮮ノ獨立ヲ傷クルノ希望ハ更ニナシ、又朝鮮ヲ利用シテ貴國ニ對シ軍略上ノ用ニ供スルノ目的モ有セス、唯國內秩序ノ紊亂シタル時ニ際シテハ、其回復ニ必要ナル範圍內ニ於テ出兵スルナリ、常ニ軍隊ヲ置キテ朝鮮ヲ占領スルノ意ニハ非ス。

外相　既存ノ露日協約ハ對等的ノモノニテ、貴國若シ朝鮮ニ百人ノ出兵ヲ爲サハ、吾モ亦百人ヲ出スト云

フ次第ナルモ、今朝鮮ノ事ヲ擧テ貴國ニ一任シ、出兵ノ權ヲモ承諾スルニ於テハ、貴國カ朝鮮ノ領土ヲ軍略的ニ利用セストノ保障モ必要ナルヘク、又貴國若シ朝鮮沿岸ニ砲臺ヲ建築スルカ如キコトアラハ浦潮旅順間ノ交通絶タルルヲ以テ、露國ハ自衛上之レヲ默視スル能ハス、故ニ軍略上之レヲ使用セサルコト、前陳交通ヲ遮斷セサルコトニ關シ、確實ナル保證ヲ得ハ、露國ハ朝鮮ヲ貴國ニ一任スルモ異存ナカルヘシト信ス、只確實ナル保證ノ那邊ニ在ルカヲ定ムルハ困難ナリ。

侯　其一點ハ貴國ノ利害上御尤ト存スルニ付、朝鮮ヲ一任セラルルニ於テハ我國ハ其保證ヲ拒マサルヘシ、然レトモ露國若シ朝鮮國境附近ニ軍略的設備ヲ爲シ、朝鮮ノ獨立ヲ危フスルカ如キコトアラハ、日本之レヲ無視スル能ハス。

外相　如何ナル保證ヲ與ヘラルルカ。

侯　如何ナル保證ト云ハルルモ、夫レヲ約束スルノ外別ニ保證ノ差上樣モナシ。

外相　朝鮮南岸ノ一小地ヲ露國ニ一任シ、其他ノ朝鮮全部ヲ貴國ノ自由ニスルコトトシテハ困難ナルヤ。

侯　貴國軍人中ニハ或ハ根據地トシテ或ハ交通防禦トシテ、朝鮮南岸ニ一地ヲ占ムル說モアル由ナレトモ、夫ハ日本國民ノ決シテ肯セサル所ナリ、朝鮮南岸コソ我邦獨立ノ爲ニ最モ重要ノ場所ナルカ故ニ、其他國ノ手中ニ陷ルヲ見ハ、日本人ハ我獨立ヲ損傷シタルカ如ク感スヘシ、故ニ朝鮮南岸ノ一地ヲ貴國ニ一任スルハ、單ニ貴我兩國間ニ協和ヲ見ル所以ニアラサルノミナラス却テ衝突ヲ促ス所以ナリ。

外相　自分ハ單ニ一個人ノ私說ヲ述ヘタルノミニテ、皇帝ノ御說如何アルヘキカ、海軍大臣其他同僚中ニ如何ナル希望アルカ、未タ知ラサル所ナリ、然レトモ試ミニ位置ヲ轉シテ我國民ノ身トナリテ御一考アリタシ、朝鮮全土ヲ擧テ貴國ニ一任セハ、我國民ハ果シテ秋毫モ不安ノ念ヲ抱カサルヘキカ、之レニ反シテ全國ニ比スレハ至極狹少ナル南岸一地ヲ吾ニ一任セラレタレハトテ、其國民不安ノ念慮ハ尠少ニシテ、朝鮮全體ヲ日本ニ一任シタル露國民不安ノ念慮トハ、其差同日ノ論ニ非スト信ス。

侯　必スシモ然ラス、「ジブラルタル」ハ一小區域ナレトモ全海ヲ支配スルノ力アリ、加之朝鮮ヲ我ニ一任シテ貴我兩國ノ協和ト日本國民ノ安心ヲ得ラルルハ、決シテ貴國ノ爲ニ不得策ナリト信セス。最近ノ北清事變ハ幸ニシテ圓滿ナル局ヲ結ヒタレトモ、支那ニハ何時如何ナル事變ヲ生スルカ殆ント豫測スヘカラス。將來萬一昨年ノ如キ事件ヲ再演スルコトアラハ、其際貴國カ背後日本ノ感情如何ヲ顧慮スルコトナク前進シ得ルト然ラサルトハ大ナル相違アルヘシ。

自分ノ吶々ヲ要セス貴國ハ大國ナリ、絶ヘス四方ニ膨脹スルノ國ナリ、之レニ反シ日本ハ四面海ニヨリテ制限セラルル國ナレハ朝鮮ノ一事ヲ委ネラレタレハトテ、左程ニ憂慮セラルルコトモアルマシ。

外相　心配ハ致サス、我等ハ何人ヲモ恐レス、兎モ角モ閣下ノ朝鮮ニ關スル成案ヲ個條書ニ認メ賜ハスヤ、然スレハ自分モ同僚ト熟議スルコトヲ得、又秘密ニ皇帝ノ御意見ヲモ承ルヲ得ヘシ、加之一ノ成案タニアラハ或ハ不同意ノ點ヲ修正スルコトモ得ヘク、或ハ當方ヨリ對案ヲ提出スルコトモ得ヘシ。

其ノ提案

以上ニテ朝鮮問題ヲ打切リ、夫レヨリ雜談ニ移リ、伊藤侯ハ三國干涉當時ニ於ケル露國ノ行爲ヲ諷刺シ、日清戰爭ノ爲ニ最モ多クノ利益ヲ得シハ露西亞ナリトテ、多少偶意的語調ヲ用ヒタトノコトタ、此會談ハ午後四時ヨリ六時迄二時間續イタカ、其翌々四日伊藤侯ハ再ヒ「ラムスドルフ」伯ヲ訪問シ、先方ノ需メニ應シテ曩ノ私見ヲ纒メ左ノ如キ個條書ヲ手交シタ後、更ニ意見ヲ交換シタ。

一、韓國獨立ノ相互保障。

二、韓國領土ノ如何ナル部分ヲモ他ノ一方國ニ對シテ軍略上ノ目的ニ使用セストノ相互保障。

三、朝鮮海峽ノ自由航行ヲ阻礙スル如何ナル軍事設備ヲモ韓國沿岸ニ爲ササルヘシトノ相互保障。

四、韓國ニ於ケル日本ノ政治上及商工業上ノ自由行動權ヲ露國ハ承認シ、且ツ政府ノ義務ヲ遂行セシムル爲、助言ト援助トヲ與ヘテ韓國ヲ補佐スル權利ハ、日本ニ專屬スルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト、右ノ內ニハ內亂及日韓兩國ノ平和關係ヲ攪亂スルカ如キ騷擾ヲ鎭定スルカ爲ニ必要程度ノ軍事的援助ヲ含ムモノトス。

五、本協定ニ依リ既存各協定ハ廢止セラルヘキコト。

外相　精讀ノ上ニ非サレハ確答ハ爲シ難キモ、一見セル所ニ依レハ餘リニ一方ニ偏シ、到底之レヲ目シテ一ノ協商ト稱スル能ハサルカ如シ。

侯　過日ノ高話ノ模樣ニテハ、我國ニ於テ朝鮮ノ獨立及其國土ヲ戰略的ノ目的ノ爲ニ使用セサルコト、並ニ朝鮮海岸ニ海峽ノ交通ヲ危フスルカ如キ設備ヲ爲ササルニ於テハ、貴國ハ朝鮮ニ於ケル商業上、工業上、政治上及軍事上自國處分ノ專權ヲ我邦ニ對シテ承認セラルルカ如キ感ヲ得タルカ故ニ、右ノ如キ個條書ヲ出シタルナリ。

外相　然リト雖モ凡ソ一ツノ協商ト云ヘハ双方ノ利益ヲ互ニ讓步的ニ規定シタルモノヲ指スカ如シ。而シテ此個條書ニ依レハ貴國ノ利益ノミヲ規定シ、我カ國ニハ總テ讓步ノミナリ。朝鮮ニ關スル現在ノ日露協商ハ對等相互的ノモノナリ。卽チ一方ニ百人ノ出兵ヲ爲セハ他ノ一方モ亦百人出兵スト云フカ如キ協定ナリ。然ルニ今日出兵ノ專權並ニ政治的專權ヲ委ヌルハ、露國ハ卽チ讓步ヲ爲スナリ。貴國ハ利益ノミナルニ反シ、露國ハ損失ノミニテ隨分困難ナリ。

侯　併シナカラ先日モ語リタル如ク朝鮮ノ事ハ擧テ之ヲ我國ニ一任セラルルニ非サレハ、日本人ハ到底安堵セサルヘシ。又朝鮮ノ獨立其他ノ保證等ハ我ヨリ求メタルニハ非サルナリ。

外相　然レトモ我地位ニモ成リテ見ラレヨ。此案ヲ基礎トシテ記名調印ヲ爲ストキハ露國人民ハ如何ナル感ヲ起スヘキヤ。露國ハ何ノ利益若クハ必要アリテ故ラニ對等的ノ協商ヲ拋棄シテ日本ノ甘心ヲ買フコトヲ勉メタカトノ論囂シキニ至ルヘシ。加之朝鮮ノ獨立ハ之レヲ保證スト云ハレルモ、政治上ニモ軍事上ニモ干涉スルコトヲ得ヘキ獨立ハ、明白ニ云ヘハ有名無實ノ獨立ナリ。既ニ此如キ利益ヲ日本ノ爲ニ承諾スル上ハ、露國ノ爲ニモ何カ利益トナルヘキ事ナカルヘカラス。凡ソ協商ト云ヘハ双方ヨ

リ互ニ讓歩スル所アルカ又ハ双方共ニ利益スル所ナケレハ、到底實用的永續的ノ性質ヲ有スル能ハサルモノナリ。此案ニテハ所謂協商ト云フヲ得サルカ如シ。

侯　然ラハ貴國ハ之レニ對シテ如何ナル利益ヲ要求セラルルカ。

外相　夫レモ皇帝ノ意見及同僚諸氏ノ各專門的觀察ヲ聞キタル後ニ非サレハ確答シ難シ。然レトモ何カ得ル所無ケレハ異ナモノナリ。過日ノ御話ニ依ルモ朝鮮ノ事サヘ貴國ニ一任スルニ於テハ將來萬一清國ニ事アルニ際シ我國ニ對シ支那方面ニ向テハ自由ノ處置ヲ爲スコトヲ認ムルト云ハレタルカ如キ感アリ。

都筑氏　侯ハ貴國若シ朝鮮ヲ吾ニ一任シ、依テ以テ日露互ニ協和スルヲ得ハ、將來清國ニ事起ルニ當リ、貴國ハ背後ニ我國ノ疑惑若クハ國民ノ敵愾心ヲ顧ミルノ必要ナクシテ、清國ニ對スル態度ヲ定ムルコトヲ得ヘシト云ヘルナリ。

外相　然ルカ、併シナカラ我國ノ北清ニ於ケル利害ノ關係ハ、恰モ貴國ノ朝鮮ニ於ケルカ如キ關係ナルカ故ニ、之レニテモ承認スルカ如キ考案ナキヤ。

侯　北清トハ如何ナル部分ヲ指サルルヤ。

外相　單ニ國境ニ接シタ部分ニ限ル。

侯　國境ニ接シタ部分ト申シテモ隨分漠然タリ。勿論如何ナル部分ヲ指シテ北清ト爲スカノ定義ヲ今日承ハルノ必要ナシ。兎ニ角貴國ノ要求セラルル所ヲ吾ニ於テ豫知スル謂ナキニ付、其要求セラルル所ヲ

記入セラレテハ如何。

外相　無論左樣ニ願度シ。然レトモ侯爵ハ今日午後出發セラルルニ非スヤ。左スレハ此協商ハ東京ニ於テ當國ノ代表ト貴國政府トノ間ニ於テ之レヲ爲サシムル御考ナリヤ。

侯　大體ノ基礎ニシテ協定ノ見込アリト認メハ、本國政府ニ電報シ其事ヲ勸告スヘケレトモ、其見込ナキニ此ノ如キ處置ニ出ツルコト能ハス。自分カ政府ニ勸告スル所ハ政府ニ於テモ多少顧ミ吳ルル事ト信ス。

外相　然シ閣下ニシテ今日御出發トアラハ、到底御滯在中ノ間ニ合ハス。

侯　歸路伯林ニ立寄リ十日乃至二週間ハ滯在スヘキニ付、彼地ニ御通知下サレテハ如何。

外相　夫レモ出來ルヤ否ヤ甚タ疑問ナリ。斯ノ如キ問題ハ熟慮ト周匝ナル調査ヲ要スルコト論ヲ俟タス。故ニ伯林御滯在中ノ間ニ合ハスルヲ得ルヤ否ヤ約束スルヲ得サルナリ。

侯　決シテ約束ヲ求ムルニ非ス。互ニ一個人ノ資格ヲ以テ談合シタル事トテ此案モ協定ノ成立スル見込アル場合ヲ除クノ外、一ノ反古ト認メラレンコトヲ希望ス。或ハ又閣下ニ於テ此基礎ニテハ協定ノ見込ナシト感セラルレハ、只今之レヲ持歸ルヘキカ。

外相　實ハ見込ナシト云フコトモ出來ス。貴我兩國共ニ目的トスル所ハ同一ナルカ故ニ之レヲ達スルノ方法モアルヘシ。只餘リ一方ニ偏セサル樣注意セサル可ラス。曾テ小村氏カ公使タリシ際互ニ無責任ニ極東問題ヲ論シタルコトモアリタリ。單純ニ攻究的ノ問題トシテ朝鮮ヲ貴國ニ一任スルニ就テハ、滿

洲ハ我國ニ一任スヘシト論シタルコトモアリタリ。勿論滿洲ヲ永久ニ占領スルノ意ハ毫モナシト雖モ、我兵ヲ撤退スルニ付テハ幾分カ規定ヲ要スルコトモアルヘシ。夫ハ扨置キ此案ニ對シ伯林ニ宛テ閣下ニ答ヘ、閣下ニ於テモ不同意ノ點ヲ更ニ當地ニ申越サレ又々當方ヨリ返答スルノ手續トナリテハ伯林ト當地ノ間ニ協議ヲ開ク次第ニシテ頗ル手數煩雜ナレハ、此談判ヲ東京ニ移ス方得策ナルヘシト信ス。

侯　東京ニ移スモ其基礎ニシテ協定ノ成立見込確然タル後ニ非サレハ到底徒勞ニ過キスト信スルカ故ニ右ノ如ク申セシナリ。

外相　侯爵ハ後日再ヒ巴里ニ赴カルル御豫定ノ樣承リタレハ、彼ノ地ニ於テ談判ヲ開始シテハ如何。

侯　巴里ヘハ再ヒ參ルヘケレトモ、其時ニテハ全ク晩カルヘシ。

外相　此事タル左樣ニ急カルルカ。

侯　別ニ急クト云フ次第ニテハナケレトモ、過日皇帝ノ勅語モアリ幸ニ自分モ來遊シタレハ、一日モ速ニ協和ノナルモノトセハ兩國々民ノ爲ニ最モ幸福ナルヘシト信シタルニ過キス。

以上ノ會談後伊藤侯ハ露都ヲ立テ伯林ニ向ツタカ、同侯ハ十二月三日ニ「ウキツテ」藏相トモ會見シテ互ニ意見ヲ交換シタ、此際伊藤侯ハ藏相ノ問ニ對シ西比利亞鐵道保護ノ爲露國ノ自由行動ヲ承認シテモ差支ナイト答ヘタラ、藏相ハ頗ル滿足ノ態テ、若シ朝鮮海峽無防備ノ約束ヲスルナラ、韓國ニ於ケル日本ノ自由行動權ヲ承認スヘシト云フタトノコトタ。

露國ノ對案

伊藤侯ノ提案ニ對スル「ラムスドルフ」伯ノ返事ハ十二月十四日附テ發送サレテ居ルカ、其大意ハ伊藤侯ト談話ノ要領並ニ其私案ヲ露帝ニ報告シ、聖慮ニ從ヒ關係諸大臣ノ意見ヲ徵シタ結果、左ノ對案ヲ提出スル。自分ハ之レヲ基礎トシテ協定ヲ遂ケ、日露間ノ誤解ヲ一掃シ、其友好關係ヲ鞏固ニセンコトヲ熱望スルモノテ、遲滯ナク談判ヲ開キ得ル爲在日本露國公使ニ訓令セントシ侯ノ返事ヲ俟ツテ居ルト云フニ在ル。

一ニ付テハ異存ナシ。

二中「他ノ一方國ニ對シテ」ナル字句ハ削除スル方然ルヘク、當方提案ニハ「日本ハ、、、、、約ス」ト書シ在ルモ、原案通リ「相互保障」ノ方御希望ナラハ之ニテモ差支ヘナシ。

三ハ原案通リ承諾ス、但シ「相互保障」ヨリモ「日本ハ、、、、、約ス」ノ方可ナラン。

四ニ付テハ左ノ對案ヲ提出ス。「政治上」ナル文字ノ存在ハ日露兩國カ互ニ保障ヲ約スル韓國獨立ノ原則ヲ侵害スル嫌アルニ付之レヲ削除シ度シ。日本カ韓國ニ勸告ノ方法又場合ニ依リテハ兵力干涉ノ方法ニテ其優越權ヲ行使スル際ハ、事前ニ之レニ關シ露國ト協議スルコト衡平ナルヘシ。日本カ韓國ニ於テ有スヘキ兵力干涉權ニ付テハ、閣下カ口頭ニテ說明サレシ條件ヲ明確ニ爲シ置クヲ要ス。卽チ韓國ニ派遣サルヘキ日本ノ兵數ハ常ニ事態ノ要求ヲ超ヘサルコト、右軍隊ハ其任務終了セハ速カニ召還サルヘキコト是ナリ。尙ホ將來ノ紛議ヲ避クル爲、日本軍ハ追テ協定サルヘキ露國々境ニ沿フ地方ノ限界ヨリ、決

シテ進出セサルヲ約シ置クコト必要ナリ。以上ノ趣旨ニ基ク修正案左ノ如シ。

四、韓國ニ於ケル日本ノ商工業上ノ自由行動權ヲ露國ハ承認シ、且ツ善政府ノ義務ヲ遂行モシムル爲、豫メ露國ト協議ノ上、助言ヲ與ヘテ韓國ヲ補佐スル權利ハ、日本ニ專屬スルコトヲ露國ニ於テ承認ス。右ノ内ニハ内亂及日韓兩國ノ平和關係ヲ攪亂スルカ如キ騷擾ヲ鎭定スルカ爲ニ缺ク可カラサル軍事的援助モ含ムモノトス。

五、前條ノ場合ニ於テ日本ハ韓國ニ派遣スル軍隊カ嚴ニ其必要ノ兵數ヲ超ヘス任務終了セハ速カニ之ヲ召還スヘキコトヲ約ス。又日本軍隊ハ露國々境附近ニテ豫メ劃定サレタル地域ノ境界ヲ決シテ越ヘサルヘキモノトス。

六、此新條約ハ露國カ韓國ニ關シ日本ニ認メシ廣大ナル權利ニ對スル僅少ノ對價ヲ爲スニ過キス、本條ノ趣旨ハ既ニ一八九八年「ローゼン」男爵ヨリ西男爵ニ提出セシ公文中ニ記載シアルモノニテ又一九〇〇年聖都ニ於テ小村氏ノ爲セル提議ノ再揭ニ過キス。

「日本ハ露國々境附近ノ清帝國領土ニ對スル露國ノ優越權ヲ承認シ、同地ニ於ケル露國ノ自由行動權ヲ決シテ阻礙セサルヘキコトヲ約ス。」

七、原案五ハ異存ナシ。

伊藤侯ハ右ノ露國對案ニ下ノ意見ヲ附シテ桂首相ニ送ツタ。第四條露國ニ豫メ協議スルコトハ出來ヌ、又第五條末段ハ之レヲ相互的トシ露國ノ軍隊モ韓國々境附近ニ來ラヌ樣ニスル必要カアル、第六條ハ甚タ漠然タ

カ、我政府ニシテ商議スル意思タニアラハ具體的取極ヲ爲シ互ニ滿足出來ル樣協定シ得ルコトト思フ。ソシテ「ラムスドルフ」伯ニ對シテハ露國ノ修正ハ其及ホスヘキ結果ヲ充分了得スル爲メ篤ト研究ヲ要スルカ、之レヲ一讀シテ得タ印象テハ、淡白ニ云ヘハ兩國ノ恒久的協和ニ到達スル望ミカ甚タ薄イノヲ恐レル、對案第六條ハ該地方テ露國ノ執ラントスル手段方法ニ關シ其ノ意ノ在ル所ヲ充分ニ知ルコトカ出來ス、又露國カ勢力ヲ行使セントスル確タル地域ニ付テモ漠然トシテ居ルノミナラス、自分ヨリ能ク說明シ伯ノ了解ヲ得タト信シテ居タ第四條ヲモ修正サレタカ、露國ノ欲スル「事前ノ協議」ニ關シテハ其危險ニシテ好マシカラサルコトヲ自分ヨリ縷々開陳シ、協和ニ達シ得ヘキ唯一ノ基礎ハ韓國ニ日本ノ完全ナル自由行動權ヲ認ムルニ在ルコトヲ說示シタニ拘ラス、此修正案テハ我國ノ地位ヲ日露兩國カ協議決定シタ共同意思ノ行使者、委囑者ニ引下ケルモノテ、事前ノ協議ト云フ事ト完全ナ自由行動權トハ互ニ相容レサル二ツノ觀念タト思フカ、此矛盾ハ第六條ノ態樣如何テ何トカ避ケ得ラルルコトト信ス、露國對案ハ又或種ノ我行動ニ限リ其自由ヲ認ムルニ反シ、露國自身ニ付テハ完全且無條件ノ自由行動權ヲ要求シ、其地域モ日本ノ分ハ明確ナ上ニ第五條ノ制限サヘ附セラレテ居ルニ露國ノ分ハ頗ル茫漠テ將來ノ彈力性ニ富ンテ居ル。右ハ露國對案ヲ單ニ一讀シテ重要タト考ヘタ事柄ノミニ對スル感想テアルカ、此基礎テ我國ノ恒久的協和ヲ求メントスルノハ頗ル困難ナ樣ニ思ハレル、然シ更ニ充分研究ノ上意見ヲ開陳スヘキモ東京歸着前ニハ其時カ無イ、ト書キ送ツタ。「ラムスドルフ」伯ノ十二月十四日附手紙ハ伯林ニ十七日ニ屆キ、伊藤侯ハ其日「ブラッセル」ニ向ケ出發シタカラ、同侯ノ返事ハ「ブ」市カラ二十三日附テ出テ居ル。